

# 軍事史学

第53巻 第4号

## 巻頭言

### 軍事文化の越境性と限界

丸島宏太

先日、軍事・戦争関係の博物館・記念館の比較研究の一環として、はじめてハワイの真珠湾一帯を訪問した。その中でもとくに印象に残ったことがある。戦艦「ミズーリ」の右舷には大戦末期に体当たりした特攻機による傷跡は今でも生々しいが、その説明文と画像で目を引いたのは、特攻の異常さを訴えたり戦艦の頑丈さを誇示する部分よりも、戦死した日本軍パイロットに最大の敬意を表して水葬に付するシーンであった。そこでこんな話を思い出した。大戦中に米潜水艦と交戦した日本海軍駆逐艦長が、戦後しばらくしてから、交戦相手の潜水艦長から敬意と友情を示す手紙をもらった、という。ここでは、敵に対する憎しみむき出しの「容赦なき戦争」(J・タワール)であった第二次世界大戦中にも、軍隊同士の畏敬の念や儀礼がなお生きていたことに注目したい。その背景に、平時から培われてきた軍隊同士の国境を越えた社交様式があったことは間違いない。その背景に、平時から周知のように、軍隊は戦争が前提の厳しい上下関係や規律を旨とした独自の価値・行動規範をもつ。つまり、軍隊は他の社会集団とは別に自己完結した価値体系をもつ軍隊社会を形成するのである。先に挙げた事例は軍隊社会の特殊環境に由来するものであり、国境はおろか敵味方の壁をも越えた軍事文化の存在を示すものと言えよう。もとより、男子国民皆兵を原則とする国民国家の時代になると、兵士の多くは普通の国民でもあり、市民社会と軍隊の価値の境界はいよいよ曖昧になる。ここに、プロフェッショナルリズムに由来する軍事固有の文化の境界が見えてくる。とはいえ、先の事例を見るならば、国民戦争の時代でも国境を越えた軍事文化がその意義を完全に失ったわけではなさそうである。しかしながら、民族対立や人種差別が背景にある国家間、集団間の戦争で、こうした軍事文化はどこまで成り立つのであろうか。たとえば同じ第二次世界大戦でも、独ソ戦でドイツの軍人とソ連の軍人にそのような共有できる価値はあり得たのであろうか。ましてや、正規軍同士の戦いですらない今日の非対称戦争で、この議論が通じるとも思えない。ここに軍事文化の限界なり地域的・時代的拘束性を見て取ることができよう。近年、軍事史は従来の作戦・用兵史や戦史の枠を超え、その射程を大きく拡げた。とりわけ普通の兵士の視点に立った研究は、軍事史固有の領域とそれ以外の歴史学分野との境界をますます曖昧なものにしつつある。我が国でも取り組まれるようになった戦争の経験史などは、もはや軍事史に分類することすら意味がないように思われる。こうした傾向は、軍事的なものが歴史研究に積極的に取り込まれたという意味では望ましい。だが、ここでもう一度、軍隊ないし軍事史固有の領域に立ち返り、そこからあらためて歴史学の問題を投げかけることも必要であろう。その突破口のひとつが、軍隊固有の価値体系＝軍事文化研究からの問いかけに見いだせるのではないかと、私は考えるのである。

(敬和学園大学)